批評紹介

清朝史通論
支那上古史

內藤虎次郎著

昭和十九年　弘文堂發行

內藤湖南博士の二大著が殆ど時を同くして出版された。清朝史通論は大正四年八月中、京都帝國大學に於ける夏季講演の速記であり、今度始めて世に出るものである。之に附載された清朝衰亡論は明治四十四年十一月より十二月にかけ三回に亘る京都帝國大學金曜講義の速記であり、もと清朝の過去及現在なる演題であつたものを、翌年改めて清朝衰亡論と題して公にされたのであるが、原書は今は稀覯書となつてゐる。先生が清朝衰亡論を講ぜられた時は革命戰の最中であり、それが出版された時は既に清朝が亡んで中華民國となつてゐたから、この書は生々しい清朝滅亡といふ大事件を前にして、冷靜な史眼で清朝の過去を追憶された感慨に滿ちた文字で綴られてゐる。清朝史通論も清朝滅亡後間もない時に成立してゐたので、清朝史全體を通觀した學問的著作としては最も早いものの一に屬するであらう。支那上古史の方は大正十年・十一年二個年の東洋史普通講義のノートが底本となつてゐる。紹介者は大正十一年に京都帝國大學に入學し、先生の講席に陪して、この書の後半の講義を承る幸を得たが、その前半戰國以前の部分を知りたく、先輩のノートを借りて轉寫したことがあつた。先生は何度か古代史を講ぜられたが、この時のが一番纏りがよかつたから、之を本にする心算だと當時から話して居られた。其後先生の健康があまり勝れず、延々になつた儘で他界されたが、今令嗣乾吉氏の手によつて之が完成を見たことは、故先生の遺志が實現されたことであり、學界の爲にも慶賀に堪へない。

博士の學風は、今更此に改めて言葉を費す必要もないが、確りした漢學の素養の上に立ち、同時に中年操觚界に活躍して現實の支那を研究されたことが、あのやうな學風を大成する背景となつたやうに思はれる。經書に現はれる眞四角な堅い支那と、現實に見る圓い柔い支那とが、先生に於いては渾然として融和してゐるのである。それで先生は教壇に於いても好んで古代史と近世史とを題目とされたが、この兩著を讀む人は直ちに紹介者の言の誤らざることを感知するであらう。

支那上古史が一見して普通の支那古代史と異る所は春秋以前太古の時代に殆ど頁の半數を費してゐる點である。尤も原來が講義であつたから、之れは偶然の要素も可也入ることで例へば後漢の時代が極く短く述べられたのは、先生が海外視察の途に上られる爲、時間が短縮された結果であつて、確か一時間の間にこの所を片付けられたと記憶する。併し大體に

於いて先生が、新出の龜甲文字や銅器銘文などの資料を驅使し、考證學的方法と先生獨特の史眼で傳說時代の支那再確認に非常な自信と興味とを持たれたことは事實である。富永仲基の佛教史研究法に共鳴して支那古代傳說の加上を論じ、年代的五帝を空間的五帝に還元せしめられた所などは動かすべからざる鐵案であり、今後の支那古代史研究の出發點とせねばならぬであらう。

清朝史通論は近世史である丈に、一際强く先生のポリチイクが現はれてゐる。ポリチイクは兎角上辷りに流れたり、學問と分裂したりしたがるものであるが、先生のそれは、此處が經世の論だと別にことわらないでも隨所にそれが滲み出てゐる。ある會社の重役が毎日資治通鑑を一卷づつ讀むといふ話を聞いて先生が、それは偉い、金儲の參考に出來るやうなのが本當の通鑑の讀み方だと賞められたことを憶えてゐる。先生のこの書も、讀み樣によつては、學者以外の人にも經世處身の虎の卷になるかも知れない。

先生は度々支那へも行かれ、清國學者との交際も廣く、又藏書にも富んで居られたので、清朝史通論に盛られた材料は恐ろしく豐富であり、それが殆ど皆先生の手許にあるか又は實地に目過されたものに係つてゐる。特に清代の書簡などを多く觀られた點では、恐らく先生は當時の日本に於いて一二を爭ふであらう。音韻學だの考勘學だの、さては文章詞曲など、取りつき憎い難問題が一度先生の手に掛ると平易に嚙み碎いて明快な說明が與へられてゐる。文化史的な內容が大部分を占めてゐるから、寧ろ清代文化史と云つてよいかも知れぬが、抑も歷史と云ふものが別に文化史と名乘らぬでも、斯ういふ風にするのが本當だとも云へる。先生の書は、何時出ても、今書いたばかりかと思はれる清新さがあり、更に色々なことを考へさせる不思議な力を持つてゐる。(宮崎市定)

西域史研究(上・下卷)

白鳥庫吉著

昭和十六年九月・同十九年四月
岩波書店刊行　A5版通計一五〇五頁

明治以後に於ける本邦史學史を顧るに、西域史研究も亦、新學問の一たるを失はぬ。而してこの新科學の創始者こそ白鳥庫吉博士にして、博士の最も得意とせらるる部門であり、殊に其の初期にありては博士以外には殆んど企て得ざりしものであつた。尤も當時に於いても博士以外に西域史研究に携りし人々は皆無ではなく、那珂通世博士・三宅米吉博士等の諸業績を逸することは出來ないけれど、眞の意味に於ける西域史研究は實に白鳥博士を以て其の權輿とせねばならぬ。

博士の西域史研究途上に於ける最初の論文は「烏孫に就いての考」(明治三十三—四年、史學雜誌十一編十一號、十二